

言葉と魔

たかはししんじ
高橋信次

八正道の中に「正語」というのがある。
これは冷静、誠実、愛の心をもって語れということなのだ。心を歪んだままにしておいて語れば、その言葉は、人の心を動揺させ、混乱のモトになるからである。

神は「光あれ」と言われた。すると光があった。

「水の間におおぞらがあつて、水と水とを分けよ」と言うと、水は、水と空とに分けられた。

これは旧約聖書に出てくる創世記の冒頭のくだりである。

天地創造は、神のこうした言葉によって完成された。

これは何を意味するかといえば、言葉は神であり、言葉は生きており、言葉は、ものを創造する力を持っていることをいうのである。

人の中傷をしたとする。すると、第三者はその中傷に心を動かされ、中傷されている人を色メガネで見えるようになる。しかも、人の口は、それこそ、自由に語られるので、言葉は生き物として、人の心を動揺させ、人から人へ中傷が伝えられると、混乱は、一層深くなってゆく。

善悪にかかわらず、言葉は、それ自体、生き物として生き、もの

を形造って行く。

憎悪の言葉、中傷の言葉、怒り、愚痴、さまざまな悪の言葉、すなわち、人心を混乱に導く言葉は、神がつくられたこの地上を、悪の毒で汚すことになる。

悪の言葉を語るそのときは、悪魔がかたわらにいて、その人をそのかしている。

過日、関西での研修会の折に、悪魔に心を乱された人がいた。一部の人びとは、その人の言葉を信じ、心が揺れた。

悪魔に乱されたその人は、わずかばかりの霊力や自分の能力を過信し、増上慢になっていた。そのため、本来の自分を見失い、自分は真実を語っているかのような錯覚に陥り、苦悩をつくった。幸い、大事に至らず、本人も、そして、その周囲も、平静を取り戻すことができたが、私たちの周囲には、たえず魔の波動が送られ、極めて巧妙なうちに私たちの心の中にすべりこんでくる。そうして、言葉を通して、人の心を混乱に陥れる。

忘れてはならない。私たちが平常心を失い、心が不安になり、人を憎んだり、気が滅入ったりしたときは、心を落ち着かせ、平常心に戻るまで、みだりに語ってはならない。言葉は、それ自体、生き物として、人の心を動かし、人びとの行動を規制するからである。

(人道科学研修所長)

